
PARTIAL TALES ~ START LINE ~

伊東 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PARTIAL TALES ｝ START LINE｝

【Nコード】

N5792D

【作者名】

伊東 光

【あらすじ】

人生をハッピーエンドにしようと、決心した女子高生。彼女と彼女を語る八人の、切なくてそれなのに元気が出てくるお話。

S・旅立ちどき

ドアを開けると、笑っているお父さんとお母さんが立っている。

深夜、ふと眼が覚め、ぼんやりとしたアタマでさっきの夢について考える。ここ五年間、^{つぼみ}蕾の見る夢は毎日同じだった。そして、また考える。なぜ、あの人は狂ってしまったのだろうか。なぜ、家族が壊れてしまったんだろうか。一つ目の理由は分かっている。二つ目も同じだ。でも、やっぱり、やっぱり認めたくない。怖いから、悲しいから、つらいから、ドアの向こうを見れない。

お父さん、帰ってきて。あの人をどこかにやって。

お母さん、戻ってきて。あの人と二人つきりはイヤ。

どうしよう、私。どうしようか、私。

映画の最後には「THE END」の文字が浮かぶ。スタッフロールのあとのお約束だ。ハッピーエンドでもバッドエンドでもこれは変わらない。間違いない、映画好きの私が言うんだから。でも、このままじゃ絶対に私の人生はバッドエンドで終わっちゃう。「THE END」の文字を不幸の文字にはしたくない。だから、だからもう、これしかない。

朝、蕾は心を決めていた。まず、城先輩^{じょう}に会いに行こう。そして話を聞いてもらおう。進まなきゃ、進まなきゃ。映画だって、何かしらの新展開が無くちゃ面白みにかけるんだし。きつと、私も進むべきだ。対決しなくちゃ、あの人と。そのための準備をするべきなんだ、そう思うとなんだか身体が軽くなった気がした。

T・記憶の中へ

「俺が卒業する二週間前と言うと、ちょうど五年前か」

二月も終わりを迎え三月が目の前に迫り始めた日の深夜、俺は水野薔に出くわした。残業帰りで終電を逃してしまい、タクシーを捕まえようとするでも無く、ただなんとなく、無心に近い状態でぶらぶらしているときだった。

「城先輩ですか」

最初は空耳かと思った。でも違った。声の主が目の前に立っていたのだから。

「おまえ、薔だろ。ぜんぜん変わらないなあ。久しぶり」

「お久しぶりです、先輩。良かったら、これから飲みませんか」

そう言って、薔は俺を深夜三時すぎまで営業している居酒屋へと連れ行つた。

「最後に会ったのが五年も前なのに、おまえの見かけが変わってないのはどういうわけだ」

中ジョッキに二口三口、口をつけてのどを潤してから、尋ねる。

「五年や、そこらで人は変わらない。そういつたのは城先輩でしたよ」

そういえば、そうだったなと記憶の紐を解いていく。

高校を卒業する二週間前、すでに俺は大学への進学が決まっていた暇を持て余していた。このときに、大学を中退することが分かっていたら、俺は焦っていただろうか。

確か、その日の朝は日課どおり、近所のファストフード店でコーヒーを飲んでいたんだろうと思う。ガキの癖に、生意気にもブラックで。日曜だったからいつも異常にのんびりしていたはずだ。

そう、ここだ。ここで薔が現れた。

「先輩、発見」

そう言っと、断りもせず、悪びれもせずに向かい合うように彼女は座った。記憶ではそうだ。ただ記憶が、でっち上げられている可能性も無きにしも非ず、といったところだ。そのときの蕾が、期待と興奮と焦りとをごちゃ混ぜにしたような顔をしていたのは間違いない。と、思う。

「蕾、何でいんの」あくびをかみ殺しながら尋ねた、はず。

「先輩っ、先輩。聞いてくださいよ」

弱小、常敗剣道部の部員同士ではあったが、恋人同士と言うわけでは無いのに水野蕾はいつも、子犬のようになれなれしく無邪気だった。いや、俺に対してだけでなく、誰にでもそうだった。そして、周囲はそんな彼女に冷たかった。そしてそして、たぶんそのことに気づいてさえいなかった自分が唯一の彼女の柱だった、という可能性もある。

今思えば、そんな中彼女が耐えてきた苦痛は想像すると、悲しい。すごく悲しい。

蕾が、「計画」の話を終えるまで俺は黙って聞いていた。

「っということですか。どう思いますか、城先輩」

「お前の家五年も前から、そんなことになってたのか」
数秒間、声を失った。のどが渴ききつて心が砂漠になっていく。手に持っていた紙コップを、口にもって行こうとするが動かない。その間、蕾の顔は何かの期待を抱いているかのように輝き続けていた。やっと言葉が出る。

「親父さんを、恨んでいるのか」

「恨んでなんかいませんよ」と即答され、俺は戸惑った。

「でも、怖いんですよね、毎晩。だからもう、こうするしかないと思っんです」

「捕まってもいいのか」そう尋ねても、彼女の顔は歪みすらしなかった。

「城先輩、この計画が成功したら、きっとハッピーエンドを迎えられる気がするんですよ」

もう何を言っても、彼女には無駄な気がした。でも言ってみた。言うしかないじゃないか、と頭の中の何かが叫んだ。

「時が解決するのを待つて見るよ。五年ぐらいじゃ人は変わらな
いんだ。十年先、二十年先まで待つてみるよ」と確かこう言った。
五年も、虐待に耐えてきたアイツにこの言葉は無責任すぎた。俺は
やっぱり柱じゃないな、思い上がりだな、と気づきそして、後悔す
る。

最後に何と言って、薔が店を出て行ったのかは覚えていない。記
憶なんてそんなものだ。

お客さん、着きましたよ、と起こされたのはタクシーの中で、マ
ンションの目の前だった。ただ、居酒屋の中ではなく、目の前に水
野薔がいないことだけが気になる。

彼女が、以前よりも遥かに幸せそうに見えたのは気のせいだったの
だろうか。

人は変わるが、記憶の精度は相変わらず変わらないものなのだと
思った。そんな夜だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5792d/>

PARTIAL TALES ~ START LINE ~

2010年10月14日19時21分発行